
リベッチパーソン

桂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リベッチパーソン

【Nコード】

N8145A

【作者名】

桂

【あらすじ】

魔王退治に行った勇者。果たして魔王を倒せるのか？そして、村に住んでいる主人公はその結果のニュースを待っていた。…たぶんコメディイ冒険ストーリーだと思います。

第1話：もはやプロローグとは言い難い

この世界には魔王がいた…

絶対的な力で支配している魔王が…

「ありきたりだなオイ！」

こう言い放ったのは一応勇者の【ユウ・シャ】だ。
あ、適当とかいうのナシの方…

「適当だなオiiiiii！」

…いいからお前魔王倒しに行けや！！

「なにこのナレーター！？」

と言いながら渋々魔王退治へと旅立った…

「いや、強制かよ！」

そして、ユウ・シャは魔王の城に乗り…

「ちよつ、待てえええい！その間の話は！？…てゆうか俺一人！？仲間いないのかよ！？」

ユウ・シャは一人で勇ましく魔王の城に乗り込んだのだった。

「またしても強制！？しかもやつぱ一人かチクシヨオオオオ！…くそう、こうなればヤケジャアアア！」

そして魔王の城の玉座の間へ辿り着いたユウ・シャ。

「出て来いやマオオオオ！成敗してくれるう！！」

ユウ・シャは壊れていた。

『フハハハハ、貴様などが私に勝てると思っているのか？』

この口調というか偉そうな態度は、たぶん魔王の声だ。

「いいから早く出てきやがれえええ！！」

『フツ、命知らずが。…良いだろう。』

一瞬暗くなったと思ったら、そこには魔王がいた…

五人ほど。

「…………いや、多すぎじゃない？」

『さあ、始めようか！』

「いや、魔王って一人じゃ……」

ズゴーン！ドドドド！ペチペチ、ゴン！バキ、ベキ、ゴキ、ドゴーン！

「作者コノヤロー……!!」

第2話：こんな旅立ち方ってアリなのか？

「は！？……階段から落ちる夢見ちまった！」

今階段から落ちる夢見て飛び起きたのが、この物語の主人公【ムラ・ビート】だ。

何その名前とか言わないように。

「あ、もう12時か。お昼のニュースみなきゃ！」

ムラ・ビートはベットの下に落ちているリモコンを取り、テレビをつけた。

ブオン

《お昼のニュースです。先日、魔王を倒しに向かったユウ・シャさんが、今日未明、ボロボロになって帰ってきました。どうやら魔王に負けてしまったみたいです。彼は体力的にも精神的にもひどくダメージを受けたみたいで、

「クソ作者ー！」

と叫んでいました。これでは、いつ世界が救われるかわかりませんね…

以上、お昼のニュースでした。》

「…軽く世界やばいんじゃない？」

ピンポーン

ムラ・ビートの家のチャイムが鳴った。…つかムラ・ビートって言いづらいからビートにします。

「はい。」

ビートは玄関に向かう。

ガチャ

「どちら様ですか…って長老!？」

「ビー…トよ、ニュー…スを…み…たか…？」

「はい。てか長老、家に戻ったほうが良いですよ!顔が真っ青で、今にも死にそうじゃないですか!」

「この…一大…事に…寝てい…られ…るか…ガハッ!？」

長老吐血。

「長老…!?!口から血が出てますよ!?!家で休まないとホント死にますってえええ!?!」

「お…前に…この…世…界を…救…つ…て…ほ…しい…の…じゃ…」

「…?なぜ僕に?僕にそんな力は…」

「ああ…ない!」

えー！？じゃあホント今なぜ僕に頼んだ！？

「だ…が、お前に…は…ゴフッ！」

多量出血および呼吸困難により長老死亡。

「長老ー！…！なぜ大切な事言う前に死ぬんですか！？…ハッ！まさか、魔王か！？長老が僕に何かを言うのを阻止しようとして…ゆるさんぞ、魔王よ！…！」

ビートは自分の思い込みで旅立ちを決めたのだった。

「あ、テレビ消すの忘れた！」

お前もう帰れ！…！

第3話：こんな仲間いたら嫌だと思っぞ

「…魔王の城に行くのは良いけど、さすがに一人じゃキツイよな。」

とゆーことで、ビートは仲間を求めて町を探しに行った。

…そして探すこと2時間、ようやく町を見つけた。

「そこかー！ー！」

いや、おかしいだろその発言は！

町の中

「ふう、やっとついたよ…村から町までの距離ありすぎだろ！ったく…」

そんなことを愚痴っていると、町の人らしき人がビートに話し掛け

てきた。

「町の人らしき人って、普通に町の人で良いだろ！」

「えー！？それナレーターに言っして下さいよ！」

と、思わずツツコミを入れたビート。

「あ、スマン。ナレーターが変なこと言っただので、つい…」

町の人は詰まらない事を言った。

「ところでこの町に仲間になってくれそうな人っていませんか？」

「仲間になってくれそうな人？うん…酒場にも行ってみればいるんじゃないか？」

とゆーことでビートは酒場に向かった。

酒場

「未成年者はお断わりだよ」

軽くつまみだされました。

「そりゃないぜ！」

「は、仲間になってくれそうな人いないかな」

とか言っていると、ビートのところに一人の男が近づいて来た。

「アー仲間ニナツテクレヨ。」

え！いきなり！？まさかの展開だよこれ！？！？
つかこつちが仲間欲しいんだけど！！

「ムリデスカー？」

「いや、やめときま…」

「キサマニ拒否権ハナシイ。フハハハハ！」

なんなのこの金髪の外人！？拒否権なしって…強制じゃねーかあああ
ああ！！！！

「僕をなめんじゃねえええ！」

ドゴツ！

あゝ痛そう。ビートの腹にボディーブローが入ったよ。

「ぐふう！」

「フハハハ、人ガゴミノヨウダ！」

コイツ仲間にする気あんの！？

「サア、ドウスル？私ニ降服スル気ニナッタカ？」

あれ？さつきと言ってること変わってね！？やっぱ仲間にする気ねえよコイツー！

「サア、サアサア！！！」

く、これ以上の攻撃は耐えられん！でも降服はしたくないし…
ヨシ、ここは交渉してみるか！

「わ、わかった。だけど一つ条件がある。」

「ジョーケン？」

「魔王倒すまで僕の仲間になってくれないか？」

「デワ、魔王倒シタ後ハ私ニツキアツテクレルンデスネ？」

「うん。それで良いなら僕も良いよ」

「オー私モソレナラOKデスヨ！共ニ戦イマシヨウ、同士ヨー！」

話わかる人でよかった〜！

「僕、ビートって言います。あなたの名前は？」

「ジョージデース。ヨロシクネ」

こうしてジョージは仲間（？）になった。

第4話：主人公だからって強くないぜ

今夜は野宿らしいよ。

「……………ジョージさん？これ、なんですか？」

ビートの前には、異様な臭いを放つなんか黒い物体があった。

「アーソレデスカ？ソレハ【フライパン】デスヨ。知ラナインデスカ？」

ええええ！？フライパンってこんなだったっけ！？確かに黒いイメージもあるが、これは行き過ぎだろ！！
っ！かなぜフライパン持つてんの？…よし、聞いてみよう！

「それよりなんでフライパン持つてるんですか？」

「料理スルタメニキマツテルジャナイデスカ」

まさかこれで今夜の料理作る気！？そんなことしたら料理にフライパンの焦げ目&臭いが移っちゃうよー！

「ジョージさん、もちろんそれ洗いますよね？」

「ハハハハ、ダイジョーブ！コレハ焦ルタビニ料理ガ絶品ニナル代物ナンデスヨ。」

あきらかに騙されてるじゃねえかそれええええ!!

「ち、ちなみにそれどのくらいしたんですか？」

「20万デウス。安イデシヨ？」

「いや、高すぎだよ!あきらかに詐偽じゃないですか!」

「エ?マジデスカ？」

「うん。」

「アノクソ魔王ー!騙シヤガッタナー!!」

え?...ええええ!?!魔王から買ったのか!?!つーか魔王のくせに詐偽なんかやってんじゃねえよ!魔王のイメージボロボロじゃん!!

「ビート」

「ん？」

「魔王絶対二殺ルゾ!!!」

「当たり前ですよ、それが目的なんですから。」

とは言え、ジョージさんがやる気だしてくれたのでちょっと嬉しいな。

「...てジョージさん!そのフライパンで料理しちゃダメですよ!」

「エ？騙サレタダケデ料理ニハ使エルンジャナインデスカ？」

「いや、そんなに焦げてたらムリですから！……て、あー！！材料全部使っちゃってるよ！どうするんですかー！これじゃ料理食えませんよ！？」

「チクシヨーーー！」

「ちょ、叫ばないで下さい！モンスター来たらどうするんですか！？」

「……ソレデスヨ！！モンスター呼ンデ、ソイツラ食エバ良インデスヨ！」

「まあ良い案だと思いますが、ジョージさん武器なしで大丈夫ですか？僕は剣あるから大丈夫ですが……」

「私ノ武器ハコノ肉体一ツサ！」

「そーですか。」

「イキマスヨ、ビート?」

「いつでもOKです!」

「…せーのっ!」

「ソイヤーーーーー!!!!!!」

なんだその掛け声みたいな叫び方。

ザザザザ!

「フツ、来タミタイデスネ」

「そうですね。」

そう言いながらジョージはファイティングポーズを取り、ビートは剣を鞘から抜いた。

すると、オオカミみたいなモンスターが15体ほどがあらわれた。

「15体って、結構多いんじゃない？」

「普通デスヨ。」

敵がなんかすごい吠えています。
ウォーンって。

「……そろそろ殺りますか？」

「モチデース！」

そう言って、二人は敵に突っ込んで行った。

ビートは剣で敵一体を切り捨てた！が、後ろから頭を噛られ、剣を振り回す。

目の前にいた敵2体を運良く倒したものの、今だに敵は頭を噛っている。

さらに剣を持ってる右腕と、左足も噛られた。

「助けてー！ヘルプ、ヘルプミィー！！」

ジョージは敵一体目を掴んで投げ付ける。すると、もう一体が飛び付いてきた！

が、ジョージのボディーブローが炸裂！一撃ですね。

ビビツた敵は逃亡し、残りは3体。ビートを噛んでる奴も合わせる
と6体だ。

「ジョージ・バズーカー！」

ジョージの体から出た光線的なものが敵3体を一瞬で消し去った。
…強…！！

「ヘルプ、ヘルプミー！」

「オー大丈夫デスカ？今助ケマース。」

ジョージは、ビートの頭に噛み付いてる奴と、右腕に噛み付いてる
奴を引き剥がし、この2体の頭どうしをぶつけた。

ゴン！という音が辺りに鳴り響く。

ビートは左足に噛み付いてる奴を剣で倒したみたいだ。

瀕死だったけど。

「救急箱持つてきといて良かった〜！一瞬お花畑が見えたもんな。」

「オー頼リナイデスネー。」

「うるさいわ！」

「ソレヨリコレ、ドウヤツテ料理シマシヨウカ？」

「そりゃ、焼いて食べるでしょ？」

「火ハドースルンデスカ？」

「その持ち運びようコンロでいいんじゃないですか？」

「火力弱スギテ焼ケマセンヨー」

「頭使つて下さいよ！そこら辺にある木の枝集めて燃やせば良いで
しょう！」

「ナルホドー！デワ枝ヲ集メテ来マス。」

数分後

「集マリマシタヨー！」

「じゃあそこに置いて。」

で、色々準備して…

「じゃ、火付けるよ。」

「マツテマシター！」

カチッ

カチッ カチッ

「あれ？」

カチッ　カチッ　カチッ

「なんで火がつかないの？」

「ア、ソーイエバサツキ火ツケツ放シニシトイタママデシタ」

「…ガス切れかあああ！」

結局この日は何も食わなかったそうですよ。

「ア、ジョージ・バズーカード焼けバヨカッタデスネ。」

「言っのおせーよ！」

第5話：ヒロインってこんな感じだよな？

ただ今港町を探しているビート一行。

「ビート、港町まで後どれくらいデスカ？」

「うーん、海が見えないからまだ先だと思う…。」

それよりジョージさん、大分しゃべり方が旨くなりましたね。」

「そうデスカ？あまり気にしてなかったのでワカリマセンデシタ。」

「…普通にすごいな。」

そんな会話をしながら歩いていると、海が見えてきた。

「あ、ジョージさん！海が見えてきましたよ！」

「おお、海に来るの久しぶりデスネ。」

海を見てはしゃいでいると、先日出てきたオオカミみたいなモンスターが仲間を連れて、ざっと100体くらいあらわれた！

「ウソオオオオ！？オイ、ナレーター！投げ遣りすぎだろ！！！」

「ビート、私に任せてクダサイ。」

「え！？100体もいるのに大丈夫ですか！？」

「ダイジョーブ、私には必殺技がありマス。」

そう言いながら敵の方へと向かったジョージ。

「いきますヨ！…ジョージ・ボンバー！！」

ジョージが技名を言った瞬間、ジョージの周りが次々と爆破し、モンスター100体全て倒したようだ…

コイツ何者！？

「確かに強いけど…なんで技に自分の名前付けたがるんだ？」

確かに。

「さあウォーミングアップもしましたし、そろそろ港町へ行きマスカ〜。」

「…そうですね。」

港町

「うおおお！海が私をヨンデウイル！！」

「はいはい、遊んでないで行きますよ。船に乗らなきゃいけないんですから。」

港

「すみません、船のチケット2枚下さい。」

「2枚だね？はい、どうぞ！」

お金を支払い、船に向かうビート達。

…後ろの方がやけに騒がしい。なので後ろに振り向いたビート。

「むうわてうえええい！」

「キヤー！痴漢よー！！」

「ええ！？いや、あんたが船のチケット勝手に持ってたから追いついてるんじゃないか！」

「泥棒じゃん！！」

「…！あ、そのアンタ！」

「？…まさか…僕？」

「そうよ！アンタ以外に誰がいるの！？」

「いや、前にジョージさんいる…っていねー！！あの野郎先に船乗りやがったよチキショウ…」

「ちょっと聞いてんの！？こんな弱い美少女が野郎に追われてんだから助けてよ！」

「弱い女が泥棒なんかするか…！
てゆーか自分で美少女とかいうなよ…」

「…で、僕にどうしろと？」

「あの野郎をどうにかして！」

「…わかったよ。」

で、その野郎を説得中…

「…てことで、あの子の分のお金。」

「はい、確かに。今度から気を付けて下さいよ！」

「どうもスイマセンでした。」

…て、なんで僕があやまんの？

つーかこの茶髪セミロングの女はなんなんだ！
図々し過ぎだろー！

え？なんでつて、そりゃあ…

船のチケット買ってやったは良いが、そのせいで同じ部屋になり、
食べ物とか全部奪われました…大惨事だよ…クソウ。

「…で、君はいつたい何者だよ。」

「アタシ？アタシはね…あれ？誰だっけ？」

「おいしいい！なんで自分の名前忘れてるんだよ！？普通そこは覚えてるだろおおお！？」

「あ、思い出した！アタシはフェイだよ！確か。」

「なんで自分の名前なのに自信持って言えないんだよ…」

「いやゝ、アタシ物忘れが激しいんだよね！」

…なんか笑いながら言ってるが、それって結構ヤバいんじゃないの？

「あれ？そーいえばアタシなんでここにいるんだっけ？」

おいしいい！さつそくかあああ！？

「ま、いつか！」

良くねーよ！てか性格もアレだから余計たちワリィーよコレエエエエ！！

「あ、そーいえばさ、アンター人で旅してんの？」

あ、まともな事聞いてきた。

「いや、僕以外にジョージって人がいるんだ。…あれ？そーいえばジョージさんどこ行っただらろ？」

そのころジョージは…

船の甲板

「んー、この風がなんとも言えませンネー」

船旅を満喫していた…

「ふうん、魔王退治ね。ムリでしょ！」

あつさり、ザックリ良いやがったよこのアマ…

「まあ、このアタシが入れば余裕だけどね」

「…はあ？」

「お！そんなにその訳を聞きたいか？」

「いや、別に…」

「ならば教えて差し上げよう！」

いや、だから別に聞きたくねーから！！

「何故ならこのアタシには…アレ？なんだっけ？」

またかよoooooooo！！

「あ、魔法だった！」

ああ、魔法ね…

「それならジョージさんも使えますよ。」

「フッフッフ、アタシのは、そんじょそこらの魔法とは違いますよ」

うわっ、ウッセ。何このキャラ？

「で？どう違うの？」

「えーじゃあその机で試してあげるよ」

そう言っつて、フェイは窓際にある机を指さした。

ちなみに部屋は、よくあるホテルみたいな感じで、ビートは出入口近くに腰を下ろして座っている。そしてフェイはベットを占領している形だ。

「で、その机に何する気？」

「まあ見ててよ」

てことで、机に目をやるビート。

すると、何か黒いものが机を包み、一瞬にして机と黒いものが消えた！

「えー？な、なにが起きたの！？」

「へへーん、凄いつしよ！？」

「う…うん。でもコレどーなってんの？」

「えーと、物体を無に還したんだよ。」

「物体を無に!?!」

「うん。」

…す、凄い!確かにこの子がいれば魔王余裕かもしれないな…

「…あ、そーいえばフェイは何でこの船に…いや、何で旅なんかしてるの?」

「忘れた!」

「はい!?!…いや、覚えてるでしょ!てか忘れたならなんで家に帰らないの!?!」

「さあ?あと家の場所は忘れた!」

なんだコイツ?バカ?
まあ良いか。

「じゃあ僕達と一緒に来ない?」

「えーメンドくさい!」

やっぱダメだよな。

「…あれ?今、何の話してたんだっけ?」

「やだな、今フエイが僕達と一緒に旅をするって決めたところじゃないか！」

「あ、そか」

バカで良かった

「…で、アンタ誰？」

バカ過ぎた……

第6話：何だかんだで魔王の城って近い（前書き）

更新遅くなりました。スイマセン！ついでにちょっと短いですが、スイマセン！

第6話：何だかんだで魔王の城って近い

やっとなついたー！魔王の城！…早っ！！

「ん、あのフライパンの貸しをかえす時が来まシタネ」

「魔王め、長老の仇をとってやる！」

「…え」と、何でこんなとこにいの、アタシ？」

それぞれの魔王への怨み（一人なんか違うけどね）を述べ、魔王の城へと歩きだす僕達。

あ！最近ナレーター調子に乗ってるので、今度から僕視点で行きます。

…と、説明してたら城に着いたみたい。

「…でか！」

そう、奴の城は想像以上にでかかった…上を見上げると、首が痛くなるくらい。

「さあ行きますよ、皆サーン。」

「…でも入り口が見当たりませんか？」

「こーすればいいんデスヨ。」

そう言うと、ジョージさんはいつものように技名を叫びながら壁を爆破した。

「ジョージ・バスター！」

ズゴーン！

！？なんか手から波動がでてた！スゴッ！！
ジョージさんっていったい何者だろ…

城内

ドスッ！ドスッ！ドスッ！

「うわぁーーーー！」

「危ないデース！」

「キャーーーー！」

この言葉からわかるように、僕達はあるモンスターから逃げている。

『グオオオオ！』

なんて説明したら良いんだろ？まあとにかく岩の固まりみたいな奴

…かな？

「！ビート、危ないデース！！」

！？岩の拳（？）が…ダメだ、避けきれない！！

「…！無に還りな…！」

その瞬間、奴の拳らしき物が消えた…まさかフェイ！？なんか一瞬キアラ変わったような…

「大丈夫？」

「うん、何とか…」

しかし、消えたのは拳だけだ。だからまたすぐに襲ってくるぞ…てかもう来てた。

『グオオオオオ！！』

やばい、何かお怒りみたい…

「逃げるよ！！」

「…何から？」

うおい！こんな時に何やってんだあああ！！

とにかく手を引っ張ってでも連れてかないと…死ぬんじゃない？

「しかたないか…行くよ！！」

グイツ！

「え…！？」

その瞬間、フェイは奴に気付いたみたい。…いや、さっきから何回も見てるけど、そのたびに記憶抹消されてんだもん。なにこの嫌がらせ？

「はあ、はあ、はあ…」

「フウ…何でこんなに疲れてんの？」

もういいからそれ…ツッコミいれんのもメンドイし。

「オウ、この階段…いかにもデスネ。」

ジョージさんの言った通り、いかにも魔王の間へ続いているような階段だった。

「本当に、いかにもだね…いよいよ魔王とご対面かな？」

階段を上っていくと、いかにもなトビラがあった。

「フェイ、これ無に還して。」

「オツケー」

フェイが構えると黒い物体がトビラを包み、消し去った…軽く恐いよ。

『……………、わ……………の……………やへよ……………そ……………』

なんだ？奥から声が聞こえる？

「魔王！？よく聞こえないんだけど。」

『……………、わ……………し……………部屋……………よ……………そ……………』

「ちょ……………何？聞こえないから中入るよ。」

うわ、中暗くてよく見えないな…

『フハハ……………ゲホッ、私の……………部屋へゴホゴホッ……………ようこそって……………言うてるだろお！』

やばい、なんか可哀想なんですけど

「オウ、魔王！よくもこんなフライパンを売り付けてくれマシタネ！借りは返しマスヨ！」

「ここどこ？」

お前もう帰れ。

『フツ威勢だけは良いようだな。だが、私達に勝てるかな？』

「そののやってみなきゃわか…え？達…って？」

どーゆうことだろ？

『メイクアップ！！』

カチッ

「「「魔王五人いるうううう！？」」」

『五つ子です。』

第6話：何だかんだで魔王の城って近い（後書き）

いよいよ魔王との対決です！人気ないんでそろそろ完結しちゃおう
と思っております（^^；

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8145a/>

リベッチパーソン

2010年10月21日22時32分発行